

『増補改訂 本願寺史』第4巻刊行にあたって（第2回）

第一章 戦時期の本願寺のあゆみ

その概要

◎第一章の構成

本願寺史料研究所が編纂した『増補改訂 本願寺史』第4巻（本願寺出版社より刊行）について、今号では第一章の概要を紹介いたします。半世紀ぶりの増補改訂となった『本願寺史』において、特に第4巻は、旧版を引き継ぐ新しい時代、勝如宗主の継職から概ね2000（平成12）年までを対象とし、第一章では、戦時期の本願寺の歩みについて叙述していきます。その内容は次のような構成からなっています。

- 一 勝如宗主とその時代
- 二 勝如宗主伝灯奉告法要
- 三 組織改革

四 報国信仰運動

五 主な法要

六 戦時教学

七 仏教婦人会・仏教青年会・日曜学校

八 龍谷学園

九 社会事業

一〇 海外開教区

一一 融和運動

◎戦時期 宗門を取り巻く社会情勢

ここでは、戦時期を、おおむね1931（昭和6）年9月18日に、関東軍参謀らによる中国東北部奉天郊外の柳条湖での鉄道爆破をきっかけに満州事変が始まっ

た頃から、1945（昭和20）年8月の敗戦にいたる期間としています。15年戦争、アジア太平洋戦争の時期とも言えます。この間、軍部が政治の主導権を持ち、事実上政党内閣は弱体化してしまいます。

政府は1938（昭和13）年4月に国家総動員法を公布して、国民経済・生活の統制を強化し、翌年4月に宗教団体を制定して宗教団体への統制を強化するなど、さまざまな法を公布して、総力戦体制をつくり、1941（昭和16）年12月には対米英蘭への開戦を決定します。そして、1945年6月沖縄での日本軍の組織的抵抗がほぼ終わり、米軍による8月6日広島への原爆投下、9日長崎への原爆投下にいたり、14日の御前会議でポツダム宣言の受諾を決定して、翌15日に天皇は戦争終結の詔書を放送しました。9月2日に日本は、米艦ミズーリ艦上で降伏文書に調印します。

第一章の内容の一部を紹介しましょう。

▼一 勝如宗主とその時代

勝如宗主は、1911（明治44）年11月1日に誕生し、1914（大正3）年5月に法統の継承・家督の相続・伯爵の襲爵をします。戦時という歴史環境のもとで宗主は青年期を歩まれ、1931（昭和6）年11月の御成年奉告法要、2度の延期を経て1933（昭和8）年4月に伝灯奉告法要を修行されました。その後、宗主は1936（昭和11）年1月入隊して兵役につき、除隊後、国内外の各地へ巡教し、再び召集を受け、除隊後宗務に専念されます。この間、宗主は嬬子^{よこ}裏方と結婚され、嬬子裏方は仏教婦人会の活動に取り組みます。宗主の両親、大谷光明・紅子^{まねこ}夫妻の歩みも叙述しています。

▼四 報国信仰運動

教団は、忠君愛国のもと皇国に奉公・貢献すべく、政治社会の状況に対応して、教団を構成する僧侶・門徒などを対象に組織的な信仰運動を、毎年名称を変

えて積極的に展開します。1937（昭和12）年9月に本派本願寺国民精神総動員運動提要进行を公表して運動を開始し、その後興亜促進運動・堅信報国興亜生活運動・大政翼賛興亜生活運動・大詔奉戴興亜報国運動・大詔奉戴興亜報国運動・戦時宗教教化運動などと教団をあげての報国運動に取り組みました。この報国信仰運動から、総力戦下のもとでの教団の信仰運動の歩みの事実をつぶさに知り、学ぶことができます。

▼六 戦時教学

政府の国威発揚・国体主義のもと、教団にとって大切な聖教の文言への、内務省や文部省などから介入を契機に聖典削除問題、教科書『真宗要義』改訂が生じ、「聖教の拝読ならびに引用の心得」作成、配布がおこなわれます。教団の対応への厳しい批判も起こりました。同時に戦時に即応する教学の形成が本格化して、1944（昭和19）年4月には戦時教学指導本部が発足します。戦時教学とは、ど

のような過程で形成され、どのような教学であったのか、その教学はどのようなはたらきをしたのかを改めて学ぶことができます。

本年は、戦後80年を迎えます。武力衝突や紛争が絶えない国際情勢から日本は「新たな戦前」に入っていくとも語られ始めています。私たちは、この第一章から戦時期の政治状況と教団の諸事実を知り、学びながら、歴史認識を改めて確認して、非戦・平和への願いを共有したいと思います。

本願寺史料研究所

『増補改訂本願寺史』第4巻

8800円（税込・送料別）

A5判、908ページ

※ご注文は本願寺出版社まで